



2年目を迎えた共同教育学部

群馬大学共同教育学部長 藤森 健太郎

けやき通信の前号で、斎藤周前学部長は、こう書いておられます。

「感染が終息すれば、計画していた形での合同授業を開始できます。合同合宿研修の計画もあります。それらの様子については、次号以降までお待ちください。」

この時の「次号」が、この号となります。結論から言えば、計画していた形の合同授業は十全にはできませんでした。また、合同合宿研修は今年度も行われませんでした。その理由は、誰もがご存じのとおりです。

とはいえ、その時々感染症の様子を見ながら、少しずつ本来の形に近づける方向になっています。いわゆる対面式の授業・行事は、今後増えていくものと期待しています。

広い意味でオンライン授業と言える形態の中においても、コロナ禍前には予期しなかったものも含め、多様な展開がなされました。共同教育学部で用意した本来の遠隔授業システムは、テレビ会議システムや、教室の前後のカメラ、音響システム等で構成され、たとえば群馬大学側で授業を行う教員の映像・音声を宇都宮大学側に送信します。宇都宮大学側にも同様の設備があり、そちらの学生の様子が教室前方カメラで撮られて群馬大学側に送信されます。つまり、群馬大学で授業をしている先生の前には、リアルに対面している群馬大学の学生と、モニターに映る宇都宮大学の学生がいるわけです。そこに、今回のいわゆるコロナ禍によって、Zoom等のWeb会議システムによるリアルタイムのオンライン授業や、LMSを用いたオンデマンド授業などが、想定外の形で入ってきました。

本来の遠隔授業システムと、コロナ禍によって緊急措置的に導入され長期化しているオンライン授業システム



との関係には、なかなか難しい面もあります。特に、本来の遠隔授業システムでは、それぞれの教室にリアルに学生がいることを想定していますから、もし両方の大学、あるいはどちらか一方でも、オンライン対応になった場合にどうするか、問題が生じます。実際、本来の遠隔授業システムとコロナ禍対応を契機に導入された諸種オンライン授業との接続・共存には、試行錯誤がありました。

とはいえ、コロナ禍が収束を迎えたとしても、いったん蓄積された諸種オンライン授業・会合のノウハウは継承され、平常時にも生かされていく、生かされるべきだ、と思います。むしろ、本来の遠隔授業システムに加えて共同教育学部の運営を支えるものの一部として積極的にとらえ、新しい時代の教育方法を探る際の前提にしていきたいと思っています。

さて、この冊子は「群馬大学共同教育学部ニュース」と銘打たれていますが、ここで、昨年度から大学院教育学研究科（教職大学院）もリニューアルされていることを強調しておきたいと思います。詳しくは、同研究科のサイトやパンフレットをぜひご覧ください。3つのコースが設置され、多くのニーズに応えつつ、教員養成の高度化に邁進しています。ともすれば共同教育学部設置のニュースの陰に隠れがちでしたが、再編された教職大学院のことも、これから様々な機会にお知らせしていこうと強く思っています。

公開シンポジウム「ぐんまの教師力を高める 2021」

教育学研究科専門職学位課程長 音山 若穂

11月14日(日)、公開シンポジウム「ぐんまの教師力を高める 2021：効率的かつ効果的な授業力向上をめざして」(主催：国立大学法人群馬大学と群馬県教育委員会との連携に係る協議会、共催：前橋市教育委員会)が、教育関係者 70 名以上の参加のもとオンラインで開催されました。話題提供者は教職大学院第 12 期生の大野大樹先生(館林市立第三中学校)です。

大野先生は「多忙な学校における効率的かつ効果的な授業力向上体制の確立」と題して、自身の大学院での課題研究と、その中心となった勤務校での実践について話題提供しました。修了後も実践は引き続き行われ、今回はその 2 年にわたる経過の報告です。

大野先生はまず、部活動指導や生徒指導などに時間が取られ、勤務時間内に研修や教科部会などの時間が取れないなど、働き方改革と授業力向上の両立が難しいという現状を指摘しました。続いて、資質向上研修や授業改善研修について分析し、課題別グループは運用が困難であり、授業参観についても効果が上がりにくいといった、研修体制における課題を析出。さらにこうした課題を解決するため、「教員間のコミュニケーションの場づくり」と「教員間の授業研究の活性化」の 2 つを柱として実践を進めることとしました。

「教員間のコミュニケーションの場づくり」では、勤務時間に含まれている給食の時間に、給食を食べながらグループの話し合いを行う LTM(ランチタイム・ミーティング)を取り入れ、教科部会と授業研究会を進めることとしました。また「教員間の授業研究の活性化」は、3～4 人の小グループでの相互授業参観を、学校全体の授業参観週間として 2 週間、この期間内にグループ内で見合う時間を 10 校時分設定し、そのうちの空き時間に参観することとしました。効率化と時短を狙い、指導案を参観者に配布したり、参観者が参観シートを書いて授業者に渡したりすることは止め、代わりに LTM 時の会話で伝え合うようにしました。相互授業参観を終えた時点で、授業研究会を行い、話し合ったことを基に各自で振り返り、カードにその内容を記述しました。カードは職員室のボードに貼り付け、職員間で共有します。このように相互授業参観と授業研究会を繰り返すことで、授業力の向上を目指しました。

2 年目の実践では、各教科の参観期間は 1 週間とし、参観期間の前週と次週に LTM を行なったりといっ

た改良が加えられました。大学院での学修の成果が、勤務校の課題解決にも持続的に寄与していることを示すものと言えるでしょう。

話題提供の後、本学教職リーダーコース・山崎雄介教授からコメントがあり、その後、群馬県教育委員会義務教育課・星野浩章指導主事から指導講評がありました。山崎教授はまず、研修が教員の義務なのに、その条件整備がきわめて不十分なことを指摘しました。大野さんの実践が、他の業務と競合しないよう配慮されつつ勤務時間内に行われていること、かつ他の既存の研修に無理のない形で接続されていること、そして改めて適度に「教科」を単位とすることで、教師の日々の困りごとや授業内容の議論が深められていることを評価しました。また、教職大学院の過去の課題研究も紹介しつつ(佐藤啓文、2016「群馬県地域共同リポジトリ AKAGI」で検索できます)、小規模校であっても複数の学校の教員が共同で授業研究を行うこともできることを示唆しました。最後に、指導教員が巡回指導にとどまらず、授業を繰り返し参観・検討した上で校内研修の講師をつとめるなど、大学と学校とが協同して学校課題の解決に取り組んでいることが本実践の大きな特徴であり、「手間はかかるが、手間をかけないと出ない結果もある」としました。

星野指導主事は、授業研究会等を充実させる大野さんの実践は、教育活動の充実に欠かせない授業力向上の「本丸」の部分であり、時間・量・空間を組み替えて充実させている点を指摘しました。また、校内研修の体制づくりは難しいものであり、学校全体の協力体制が必要であるなかで、本実践では教職員も成果を感じており、LTM は有効な方策であろうと評価しました。また、授業参観や研究会には空き時間の活用も考えられること、年度当初や前年度に計画をしたうえで月に 1 回は参観や研究に充てたいこと、「部分見」の授業参観も考えられることが指摘されました。さらに、ICT の活用も考えられるとして、「10 分でわかる学習評価」等、研修動画等を有効活用しながら研修を進めていくことが大切だとしました。

オンライン開催にもかかわらず、参加者からも意見が交わされ、充実したシンポジウムとなりました。関係者各位に深く感謝いたします。

令和4年度採用 群馬県教員採用試験結果

学生支援委員長 三國 正樹

令和4年度採用群馬県教員採用試験の本学合格者は、現役101名、既卒者33名、合計134名という結果でした（表1）。全体合格者に対する占有率は、小中特別支援学校が35.3%、高等学校が22.2%、全体では33.8%でした。表2は平成30年度から令和3年度までの志願者数（現役生）に対する一次・二次試験合格者数と合格率を示すものです。二次試験の合格率は昨年度に比べやや増加しました。占有率も増加しましたが、目標としている40%という数字に届いていないことは今後に向け

での課題と言えます。

昨年度同様、採用試験の小論文指導や特別講演会などはオンラインで開催し、「二次試験対策講座」は直前に群馬県の警戒度が上がったため、対面とオンラインの併用で行うなどの工夫をいたしました。また、今年度は同窓会による支援事業（面接試験の相談会・1年生に向けた講演会）も行われ、ご協力に感謝しております。

今後も学生支援委員会の事業にご理解とご協力をお願い申し上げます。

表1：群馬県公立学校教員採用試験の校種別結果と占有率（既卒者含む）

令和4年度採用	全体合格者数	本学合格者数			占有率	
		現役生	既卒者	合計	現役生	全体
小学校	110	11	4	15	10.0%	13.6%
中学校	190	73	19	92	38.4%	48.4%
特別支援学校	51	12	5	17	23.5%	33.3%
小計	351	96	28	124	27.4%	35.3%
高等学校	45	5	5	10	11.1%	22.2%
合計	396	101	33	134	25.5%	33.8%

表2：群馬県公立学校教員採用試験志願者数（現役生）と合格率

採用年度	志願者数	一次試験合格者数 (志願者に対する合格率)	二次試験合格者数 (志願者に対する合格率)
令和4年度	150	123(82.0%)	101(67.3%)
令和3年度	158	138(87.3%)	102(64.6%)
令和2年度	154	136(88.3%)	113(73.4%)
平成31年度	187	146(78.1%)	126(67.4%)
平成30年度	179	149(83.2%)	110(61.5%)

令和3年度の新型コロナウイルス対応 ～持ち込んだとしても広げないために～

教務委員長 佐野 史

例年、多数の学生で賑わう講義棟の6号館（旧C棟）ですが、令和3年度は新型コロナウイルスの影響により、静まり返っている時期が多く見られました。それでも、前期は一度も大学に来なかった学生もいましたが、後期は多くの学生が週に一度は大学に来ているようです。なお、感染を懸念する学生にはオンラインでの在宅受講を実施しています。

感染拡大防止のために学部ではさまざまな仕組みを整え、学生は以下の手順で対面授業に臨んでいます。まず大学に来る前に検温及び健康観察を行い、オンラインで報告します。大学に来たら、各所に設置された消毒薬で手指の消毒を行い、「入口」扉から教室に入ります。QRコードを使ってその時間に着席した座席を報告します。使える座席は1つおきで、教室は常時換気中です。授業後は身の回りを清拭して、QRコードで退室を報告し、「出口」から退室します。授業の他、研究についても手順を整えました。

ただ、理想的な手順は整備したものの、指示通りに動

かないのは人の常ですので、ポスター掲示や休み時間のアナウンス、メールでの呼びかけなどによる注意喚起も随時行っています。特に第五波が沈静化した12月現在は気の緩みが見受けられる上、新たな変異株も出現したことから、今一度、感染拡大防止の徹底の必要性を感じています。新型コロナウイルスは感染力が強く、潜伏期間が長いため、感染したことに気づかないまま大学に来る可能性は誰にでもあります。誰かが持ち込んだとしても大学内で広げないように、引き続き感染拡大防止に努めていきたいと考えています。



注意喚起用のポスター掲示

ICT 活用指導力の向上をめざして

教育実践センター 紺谷 正樹

内閣府は第 5 期科学技術基本計画にて“Society5.0”を提唱しました。特筆すべきは“サイバー空間とフィジカル空間との融合”を指摘した点です。それに呼応するように、文科省は GIGA スクール構想を発表しました。この「構想」は、COVID-19 の世界的流行により、その環境整備が一気に加速しました。教育現場では、新しい学習指導要領への対応と同時進行でオンライン授業の充実をはじめとする ICT 活用指導力の向上をめざし、日々研修に努めています。本学部においても、その教育現場の変化を機微にとらえ、教員に求められる総合的な力を提供するために、ICT 機器の充実、教育環境の整備の充実を行っています。本稿では、ICT 活用指導力育成に向けたアクティブラーニング教室（C105）の活用事例ならびにタブレット端末とそのアプリを紹介します。C105 教室には iPad、Apple Pencil（第 2 世代）40 セット、タブレット三脚 5 台、可動式モニタとホワイトボードが 10 台常備されています。共通アプリは思考の整理

に役立つ“ロイロノート”がインストールされています。自己のアイデアをデジタル付箋紙に入力し、それらを整理・共有するなどの活動を通して、主体的に対話する能力の育成を図ることができます。写真に示す移動式ディスプレイは Wifi 接続によりミラーリングができます。（マルチ OS 対応・同時接続 4 台）

ICT を活用した学習場面は「一斉学習」「個別学習」「協働学習」に大別できます。これまで「協働学習」は、机や椅子にキャスターが付いていなかったため、その活動が制限されました。C105 教室は机とイスが可動式のため、その影響がありません。新しい学びの空間となっております。



音楽専攻・美術専攻が体験イベントを実施

入学試験委員長 齋江 貴志

群馬大学におけるオープンキャンパスなどの中・高校生を対象とした広報活動は、令和 2 年度からコロナ対策として、対面型からネットを介したオン・デマンド型へと切り替えて実施しています。手軽さからか、幸い参加者は増えて好評を得ていますが、画面を介すると伝わりづらい情報も多く、対面を希望する声も寄せられています。そこで、実技が教科内容の学修に重要な位置付けとなっている音楽専攻、美術専攻において、8 月初旬にそれぞれ 1 回、半日の短い時間ではありますが、キャンパス内での体験イベントを実施しました。

両専攻とも 20 名（保護者除く・高校生）の定員予約は告知から早々に上限に達し、当日は十分な感染症対策のもとに実施し、好評裏に終了することができました。

イベントは、音楽専攻では教員と在学生による演奏会を、美術専攻では絵画、彫刻、デザイン、美術教育の中

から 2 つの実習授業を体験するという内容で行われました。参加者のアンケートからは満足度の高さもさることながら、大学の専攻において教科や教育を学ぶとはどういうことか、また、共同教育学部やそこに集う教員や学生がどのような雰囲気かなど、画面や印刷物からは感じることができない、貴重な機会を得たことが読み取れました。そして、開催側としても、広報におけるネット活用と実体験をどのように組み合わせ理解を促していくか、今後のヒントになるイベントだったと感じます。



体験イベントの様子
(美術専攻・絵画分野)



群馬大学共同教育学部ニュース「けやき通信」 第 12 号（2022 年 2 月）

発行：群馬大学共同教育学部

〒 371-8510 群馬県前橋市荒牧町 4-2 / TEL：(027) 220-7204 / URL：<https://www.edu.gunma-u.ac.jp/>

・本紙に関するご意見ご感想ございましたらお寄せください。